

## 大連出張について

蔡 毅

去る3月12日から16日まで、私は明治末期の日中関係についての資料を調査するため、大連外国語大学に行ってきました。

大連外国語大学は遼寧省大連市にあり、1964年に設立された中国東北地方における唯一の外国語専門大学で、特に日本語教育に関しては中国全土においても屈指の名門です。改革開放後の八十年代にさらに「漢学院」が新設され、世界からの留学生たちがそこで中国語および中国文化・経済などを学んでいます。中でも一番多いのはやはり日本人で、南山のアジア学科生が今まで何人かここに留学し、学士号まで取得した人もいます。しかし、私は今回、留学交流のためではなく、日露戦争がこの地で起こり、それに関連する珍しい資料が大連外国語大学図書館に所蔵されていると聞き、調べるために行ったのです。結果は期待通りにならず、あまり発見はありませんでしたが、意外にも日本ではなかなか見つからない清末の若干の詩集をそこで目にすることができたので、大変うれしく思いました。なお、ついでに市内キャンパスにある留学施設も見学しました。同施設内の教室も宿舍もかなり整っていましたが、郊外の広大な敷地に新しくできたキャンパスはもっと立派なものでした。ハードの面のみならず、ソフトの面においても整備が進んでおり、たとえば、周知の通り今の中国はメディア規制が厳しく言論自由というにはまだ程遠いのですが、国の特別許可を受けたのでしょうか、構内には大きなアンテナが設置されていて、大学のホテルでNHKなどの外国テレビ番組を受信できたことから、中国の大学環境の着実な進歩にあらためて期待を持つようになりました。

資料よりは、日露戦争遺跡の現地調査の方がむしろ収穫が大きかった。東鶏冠山、203高地など激戦が行われた土地に塹壕や記念碑、陳列室があり、さまざまな展示品が当時の戦闘の残酷さを物語っていました。ところが、こうした遺跡にはいずれも「勿忘国恥」(国の恥を忘るるなかれ)という看板が立てられていました。やはり、自国の土地で列強が勢力を拡大するために戦争を行い、大勢の中国人が無残な犠牲になったことは、中国人にとっては屈辱的な記憶だという趣旨から、このような遺跡が保存されてきたのでしょう。

大連は上述の歴史的な原因もあって日本人にとってはゆかりが深いので、あちこち日本式の建物が残っている一方、都市建設は東北地方で一番進んでいるところとして、近代的な高層ビルも立ち並んでいます。とくに広場が二十以上を数えて、中国では一番多いと大連人が胸を張って誇るように、町全体が広々として心地よく感じられます。

大連出張について（蔡 毅）

広さはアジアと言われる星海湾広場とその周辺の異彩溢れる建築群を眺めると、舌をまくばかりでした。今の中国はたしかに問題山積で、たとえば大連は海浜都市として中国では有数の空気がきれいな町のはずなのに、この数日間の滞在ですでに喉の痛みを覚えました。環境破壊がどれほど深刻かこれだけみてもよく分かり、中国はそれに直面しなければなりません。今まで世界を驚かせるほど急ピッチで成長してきた実績も否定できないでしょう。これからも温かい目で見守っていきます。母国がぜひ正しい道を歩むよう、祈ってやみません。